2022年6月12日 礼拝メッセージ

聖書:ルカの福音書13章31～35節

説教:預言者はエルサレムで死ぬ

はじめに

ある調査によれば、日本人の半数以上が自分の家で最期を迎えたいと考えているそうです。しかし現実はなかなか思い通りになるものではありません。私もできれば最期は畳の上で死にたいと望んではいますが、高速道路を100キロで走っていた車が、なんの前触れもなく突然急停止するような事故を経験すると、人間というものはいつどこでどのように死ぬか、まったくわからない。そんな思いをいたしました。

今日の箇所でイエスは、「預言者がエルサレム以外のところで死ぬことはあり得ないのだ」と語ります。エルサレムの自分の家で平安に最期を迎えたいという意味ではありません。ご自分はそこで殺されていく、ご自分の死に場所はそこだ、と語っているのです。どうしてこのようなことを語るのか。ここに込められている意味について考えてまいります。

１　パリサイ人の脅迫

31節。「ちょうどそのとき、パリサイ人たちが何人か近寄って来て、イエスに言った。『ここから立ち去りなさい。ヘロデがあなたを殺そうとしています。』」

前回のところでイエスは、神の国に入る門はどのようなものであるかを解き明かされました。そのとき、あなたがたは広い門ではなく、狭い門から入るように努めなさいと勧めてから、30節でこう語りました。「いいですか、後にいる者が先になり、先にいる者が後になるのです。」自分は神の国には入れないと悲しむ人たち、世間一般の基準で見るなら「負け組」と呼ばれるような人たち、その人たちこそが神の国に入るとき先頭に立つことになる。ところがも一方、この世で先に立っていると思われている人たち、ここで言えばパリサイ人や律法学者たちのような宗教的な権威を持つ人たちであったり、権力の頂点に立って人を苦しめているような者たちですが、そのような人たちは神の国に入ろうとするとき、一番最後に並ぶことになると語った。

「ちょうどそのとき」に、パリサイ人たちが何人か近寄って来て、イエスを脅迫し始めます。たまたま、ではありません。イエスのことばに強く反応したということです。丁寧なことばに訳していますが、ヘロデの名前をちらつかせながら、ドスの利いた声で脅迫している場面です。

ヘロデは、日本で言えば天皇家に相当するような家柄で、これも日本と同じですが、ヘロデ家の権威を傷つけるようなことはしてはいけない雰囲気が当時のイスラエルにありました。ところが洗礼者ヨハネは、そのタブーを破ってヘロデのスキャンダラスな罪を公衆の面前で指摘したため、ヨハネを捕らえ、首を切られて殺される。それをしたのがヘロデです。

そういうことがあってから、やがてイエスは国中の有名人となり、人々はイスラエルの王となることを期待し始めます。ヘロデにしてみれば、自分の地位を脅かす存在ですから、当然のごとくイエスを憎んでいく。パリサイ人たちも、自分たちの権威が脅かされることを恐れて、イエスを憎んでいく。ヘロデの名を使ってイエスを脅迫します。

２　三日目に働きを完了する

１）エルサレムで死ぬ

これに対するイエスの答えはこうです。32節。「行って、あの狐にこう言いなさい。『見なさい。わたしは今日と明日、悪霊どもを追い出し、癒やしを行い、三日目に働きを完了する。』」

ここだけ読むと群衆の目の前で、「ヘロデなんか怖くない」と強がりを言っているようにも聞こえます。しかし単なる「はったり」でないことは次の33節で明らかになります。「しかし、わたしは今日も明日も、その次の日も進んで行かなければならない。預言者がエルサレム以外のところで死ぬことはあり得ないのだ。』」

エルサレムにはヘロデがいます。パリサイ人、律法学者たち、そして神殿を管理する祭司長たちもいた。それはまるで、完全武装して虎視眈々と待ち構えている敵の要塞に、丸腰で立ち向かうようなものです。最初から戦いの結果は見えている。予想どおりに、イエスはエルサレムで逮捕され、裁判にかけられ、十字架にかけられ、殺されていく。「預言者がエルサレム以外のところで死ぬことはあり得ない」ということばのとおりになっていった。

しかしどうしてここまでエルサレムにこだわるのでしょうか。

２）めんどりがひなを集めるようにしたが

皆さんは、「神」と聞くとどんなイメージを持たれるでしょうか。悪いことをすれば厳しく罰する神。だから神は怖いと言う方がいます。それは間違いではありません。でも小さな子どもを育てている親のことを考えてみてください。子どもが悪いことをしても叱らない、「いいよ、いいよ」と言ってそのままにしたらどんな子どもに育つか、わかりますよね。そうならないように、親は時には子どもを厳しく叱る。それは愛情の表れです。しかし、いつも叱っているのではない。神がどんなに愛情豊かな方であるか、イエスはこのように表現する。34節後半。「わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。」

野鳥に興味がある方は既にご存じだと思いますが、外敵や強い日差しから守るため、あるいは凍えてしまわないように、親鳥は翼の下にひなを集め習性があるそうです。白鳥のような水鳥になると体の上の羽の間に載せる。親から虐待される子どもが絶えない時代ですから、鳥と人間とどちらが愛情深いのかと考えさせられます。神が私たちを愛して下さる愛情はこれに似ていると言われます。

しかし、「ひな」にたとえられるているエルサレムの人々はどうしたか。せっかく親鳥が翼を広げ、安全なところで休みなさいと言ってくれたのに、見向きもせず、神から遣わされてきた預言者たちを石で殺した。確かに旧約聖書には、そのような預言者が何人も出て来ます。

３）ヨハネを殺す

なぜ人々はそんなことをしたのか。簡単です。自分たちの一番聞きたくなかったことを語ったから。あなたが拝んでいる偶像を捨てて、罪を悔い改め、神に立ち返りなさい。そのように語ったから。これを聞いた人々は預言者を憎み殺していく。殺されたのは旧約の時代ばかりではありません。イエスの時代になっても、殺された預言者がいた。洗礼者ヨハネです。先ほども申したように、彼はヘロデの手によって殺されました。

神が、そのような罪を見のがすことはありません。必ず罪をさばきます。イエスが「見よ、おまえたちの家は見捨てられる」と語るのは、神にしてみれば当然です。しかし、そこで話しが終わっていたなら、私たちはだれひとり救われる可能性はなかったでしょう。私たちがいま安心してここに座ることができるのは、神がなお私たちを救おうとされたからです。いったいどのようにしてでしょうか。

３　イエスを見るとき

１）詩篇118篇26節

35節後半を読みます。「おまえたちが『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』と言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。」

日本語聖書で二重かぎ括弧になっている部分は、詩篇118篇26節前半からの引用です。でもみなさんは、イエスが語ったことばの意味が読み取れるでしょうか。35節の前半で「お前たちの家は見捨てられる」とあるので、後半もさばきのことばであろうとは思うのですが、「決しておまえたちがわたしを見ることはない」とはなにか、よくわからない。

２）エルサレム入城（19章38節）

そこでまず、「おまえたち」と呼ばれるエルサレムの人々が、「祝福あれ」と語った時はいつだったのか、そこから確認していきましょう。19章38節です。イエスがエルサレムに入城される時、人々は道に自分たちの上着を敷いて、歓声を上げてイエスを迎える。そのときに叫んだのがこのことば。イエスが、いよいよイスラエルの王となると人々が期待して叫んだ。そうしますと、人々がイエスを見たのは、そのときだったということになる。でも、実際はどうでしょう。別にエルサレムに入る時だけではない。人々は、いつでもイエスを見ることができた。それなのに、そのときまでわたしを見ることはないと断言する。これでは辻褄が合いません。どう考えたらよいのでしょう。

３）お前たちの家は見捨てられる

35節前半に戻ります。「見よ、おまえたちの家は見捨てられる。」これはエルサレムの人々へのさばきのことばと思っていました。でもよく考えると、「お前たちの家」とは誰のことか。エルサレムには神殿があり、その神殿のことを「家」と呼ぶことがしばしばあることを思いだしてください。また、イエスが「この神殿はご自身のからだである」と言われたことも重要です。そうなると、「おまえたちの家は見捨てられる」とは、エルサレムへのさばきではなく、ご自分がさばきを受けられることを語っていたことにならないでしょうか。

そうすると、「これこれ、と言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない」とはどういう意味かもだんだん明らかになる。エルサレムに入られたイエスの身に何が起きたか。人々は、「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」と叫んでイエスを迎えたのに、一転してイエスを憎みイエスを十字架につけた。そのようにして、エルサレムの人々は十字架さばかれていく神のひとり子を見た。それと同時に、自分が神から遣わされた預言者を殺すような者であったことを見なければならなくなった。「おまえたちがわたしを見る」とは、このことだったのです。

４）翼におおわれる恵み

神の子を殺した罪は重大です。さばきから逃れることはできません。しかし一方、神はめんどりがひなを翼の下に集めるように、どんなにひどい罪を犯した者であっても、救われて欲しいと願っている。私たちが「ひな」であるならば、私たちの「めんどり」になられたのはだれですか。イエスです。神から下された怒りのさばきから、イエスはまるで翼を広げるよにして守ろうとされた。この翼の下にあなたも入りなさい。神は呼びかけて下さいます。そのことをはっきりと示してくださった場所がエルサレムであった。

どんな脅迫を受けようとも、この方はそのエルサレムを目指して進んで行かれます。そこの神の愛を見ることができます。